八日市地方遺跡Ⅳ

店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008.3

株式会社クスリのアオキ
石川県小松市教育委員会

例　言

1．本書は、株式会社クスリのアオキが行う店舗建設事業に伴って実施した八日市地方遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査（現地調査・出土品整理・報告書刊行）は、株式会社クスリのアオキの委託を受け、小松市教育委員会が実施した。
3．発掘調査（現地調査・出土品整理・報告書刊行）に係る費用は、株式会社クスリのアオキが負担した。
4．現地調査は平成19年度に実施した。調査地・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。
〔調　査　地〕石川県小松市日の出町地内
〔調 査 面 積〕132㎡
〔調 査 期 間〕平成19年10月１日～11月２日
〔調査担当者〕坂下義視
5．出土品整理・報告書刊行は平成19年度に実施し、坂下が担当した。
6．発掘調査に係る図面・写真・出土品等の資料は、小松市教育委員会で保管している。
7．本書についての凡例は下記のとおりである。
（1）本書に示す方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。
（2）本書に示す水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面）による。
（3）遺物番号は、本文・遺物観察表・挿図・写真図版とで一致する。
（4）土層及び遺物の色調は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に基づき表示した。

目　次

第Ⅰ章　位置と環境……1
第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境
第３節　既往の調査

第Ⅱ章　経緯と経過……7
第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の経過
第３節　出土品整理・報告書刊行

第Ⅲ章　調査の成果……7
第１節　調査の概要
第２節　出土遺物
第３節　総括

写真図版　１・２

報告書抄録

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

小松市は石川県南部に位置する市域面積371.13㎢、人口11万人弱の都市である。市域は北西部で日本海に面し、西は加賀市、北は能美市、東は白山市、南は市域の最高峰である大日山（標高1,368m）を境に福井県勝山市と接する。南北に長い市域は、大部分が山岳地とそれに続く丘陵地であり、北西部の狭小な平野部に市街地と農地が集中している。

第１図　小松市の位置

市街地が広がる平野部は、北部の梯川及びその沖積平野と、南部の月津台地と加賀三湖及びその潟埋積平野とに大きく二分できる。梯川は県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、白山山系大日連峰の鈴ヶ岳（標高1,174m）を水源とし、郷谷川・滓上川などと合流し軽海町付近　ナ平野部に出、これより西方に向い迂回曲流して鍋谷川・八丁川と合流したのち小松市街北部をかすめ、木場潟より発する前川と合流して日本海に注いでいる。古来より幾度となく氾濫を起こしてきた河川ではあるが、稲作に適した立地から、流域には現在も水稲単作を中心とする農業地帯が広がっている。また、梯川と加賀三湖は各水系の集落間や日本海とを結ぶ水運路としても利用されてきたようである。

八日市地方遺跡を含む小松の中心市街地は、月津台地から北に延びる標高２m前後の微高地、沖積層に埋没した浜堤列の一つと考えられる砂堤帯上に位置し、北は梯川、西は今江潟、東は木場潟から延びる潟埋積平野に囲まれる。本遺跡は、ＪＲ小松駅の東、小松市日の出町・八日市町地方地内に所在する。砂堤帯の東の縁、この砂堤帯を横断する九龍橋川と猫橋川に挟まれた区域に立地するようだ。

第２節　歴史的環境

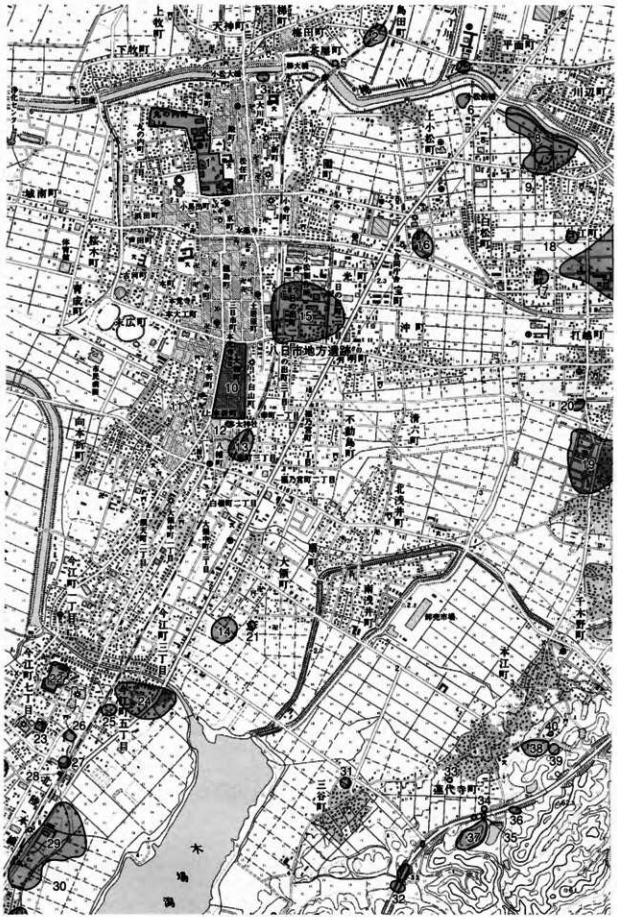
月津台地上や加賀三湖周辺では、今江五丁目遺跡（26）・五郎座貝塚（24）などの縄文時代中期の集落が見られる。砂堤帯上でも八日市地方遺跡（10）で縄文時代中期から晩期の土器や石器が出土しているが集落の動向は不明である。

弥生時代中期には八日市地方遺跡に大規模な環濠集落が出現する。集落の中心を流れる埋積浅谷からは土器・木製品・玉類など多種多様な遺物が多量に出土しており、北陸を代表する拠点集落として知られている。しかし、弥生時代後期以降、集落域は梯川流域の自然堤防上へと移動する。梯川流域では、古墳時代・古代・中世を通じて断続的に集落が営まれるようだ。

一方、月津台地は、古墳時代後期には墓域となり、御幸塚古墳（23）・土百古墳（28）・矢崎Ｂ古墳（30）をはじめ、多数の古墳が築造される。６世紀末から７世紀初頭、三湖台古墳群の終焉と同時に薬師遺跡（29）や額見町遺跡など多くの集落が出現する。これら月津台地上の古代集落は、丘陵地での製陶・製鉄遺跡群や渡来系移民などとの関連が窺われる。

砂堤帯上では、弥生時代後期以降、古墳時代・古代の遺跡は確認されていない。文献では、８世紀後半頃の初期荘園として西大寺領本堀荘の名が見える。梯川下流と今江潟・木場潟に囲まれた低湿地、本遺跡の南西の地域をその荘域に比定する見解がある。

中世にはいくつかの遺跡が確認されるようになる。本遺跡の南に位置する幸町遺跡（13）では、



第２図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

14世紀末から15世紀中葉の鍛冶工房と推定される遺構が検出されている。本折城跡（10）や御幸塚城跡（22）など一向一揆関連の砦といわれる遺跡も存在するが実態は不明である。また、文献上でも、小松・本折・御幸塚などの名が見える。小松・本折の地は、梯川とそれに連なる加賀三湖、北国街道といった水陸交通をおさえる軍事的な要衝であったと考えられる。

近世の小松は、寛永17（1640）年の前田利常の入城を契機として、侍屋敷や町屋が形成され、城下町としての体裁が整えられる。利常の没後は城下町としての性格は薄くなるが、交通・物流の要衝であり、南加賀における商業・産業の中心都市として存続することとなる。

No	遺跡名称	種別	時代
1	小松城跡	城跡 史跡指定地	近世
2	島田A遺跡	散布地	古墳～古代
3	大川遺跡	集落跡	近世
4	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生
5	梯川鉄橋B遺跡	散布地	弥生
6	平面梯川遺跡	集落跡	弥生
7	平面梯川B遺跡	散布地	弥生
8	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世
9	白江堂跡	館跡	室町
10	本折城跡	城跡	
11	上本折遺跡	散布地	中世
12	多太神社境内遺跡	散布地	室町
13	幸町遺跡	集落跡	中世
14	大領遺跡	散布地	奈良・平安
15	八日市地方遺跡	集落跡	縄文・弥生 中世
16	上小松遺跡	散布地	平安
17	白江遺跡	集落跡	弥生～中世
18	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世
19	吉竹遺跡	集落跡	古墳

No	遺跡名称	種別	時代
20	吉竹B遺跡	堰跡（旧河道）	古墳
21	浅井畷古戦場	史跡指定地	安土桃山
22	御幸塚城跡	城跡	室町
23	御幸塚古墳	古墳　史跡指定地	古墳
24	五郎座貝塚	貝塚（消滅）	縄文
25	今江横穴群	横穴墓（消滅）	
26	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古代
27	土百遺跡（胴百遺跡）	散布地	縄文
28	土百古墳（駒塚）	古墳	古墳
29	薬師遺跡	散布地	奈良～平安
30	矢崎B古墳	古墳（消滅）	古墳
31	三谷遺跡	散布地	縄文
32	三谷大谷遺跡	集落跡	平安～中世
33	蓮代寺瓦窯跡	瓦窯跡	近世前期
34	蓮代寺古窯跡	窯跡	近世末期
35	蓮代寺ﾑｺﾝﾔﾏ遺跡	製鉄跡	古代
36	蓮代寺ｶﾞｯｼｮｳﾀﾝ遺跡	炭窯跡	飛鳥
37	蓮台寺城跡	城跡	
38	蓮台寺跡	寺院跡	
39	蓮代寺A遺跡	製鉄跡	
40	本江古窯跡	窯跡（消滅）	近世末期

第１表　周辺の遺跡一覧

第３図　調査区位置図（S=1/1,000）

第3節　既往の調査

昭和5年（1930）に後藤長兵衛氏が磨製石斧を採集したことが遺跡発見の契機となり、昭和24年には小松高校が、昭和25年には明治大学と石川考古学研究会が合同で発掘調査を実施した。調査で出土した土器は、昭和27年の日本考古学会第10回総会において、杉原荘介氏により「加賀・小松出土の弥生式土器」として報告され、以後「小松式」と呼ばれるようになる。

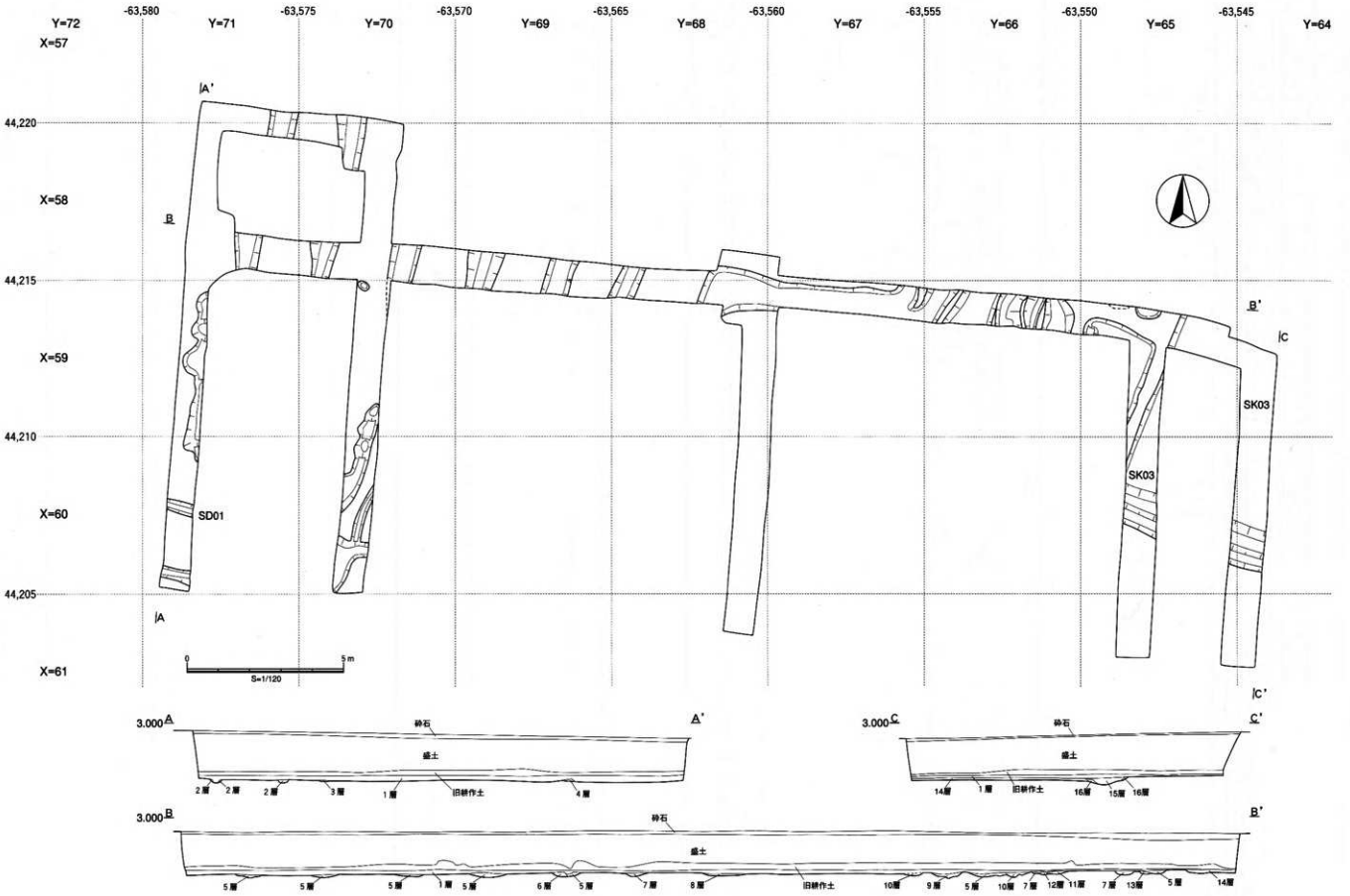
平成に入り、小松駅東土地区画整理事業に伴う調査（平成5～12年度　小松市教育委員会　調査面積約32,000㎡）、北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に伴う調査（平成9・11年度　石川県埋蔵文化財センター　調査面積6,270㎡）、共同住宅建設に伴う調査（平成18年度　小松市教育委員会　調査面積1,300㎡）など大規模な発掘調査が実施されている。

これらの調査により、集落中心を南北に流れる埋積浅谷・集落を囲む多重の環濠・方形周溝墓・井戸・掘立柱建物・平地式建物などの遺構、膨大な量の木製品・石製品・土製品などの遺物が確認され、八日市地方遺跡が弥生時代中期の大規模な環濠集落であることが判明している。

第4図　調査区位置図2（S=1/3,500）

土層註

1層　黒褐色砂質埴壌土(2.5Y3/1)　炭化物僅かに含む
2層　1層に黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)混じる
3層　1層と灰色砂土(5Y5/1)の混層
4層　灰色砂土(5Y5/1 細砂)
5層　1層に黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)・灰色砂土(5Y5/1)少し混じる
6層　灰色砂土(5Y5/1)に黒褐色砂質埴壌土(2.5Y3/1)・黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)僅かに混じる
7層　1層と黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)・灰色砂土(5Y5/1)の混層
8層　黒褐色砂質埴壌土(2.5Y3/1)　炭化物僅かに含む
　　1層と似るがやや砂質
9層　黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)
10層　1層と似るがやや砂質
11層　灰色砂土(5Y5/1)に黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)僅かに混じる
12層　灰色砂土(5Y5/1 粗砂)と黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)の混層
13層　灰色砂土(5Y4/1)に黒褐色砂質埴壌土(2.5Y3/1)・黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)少し混じる
14層　黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)に灰色砂土(5Y5/1)僅かに混じる　白砂粒含む　炭化物僅かに含む
15層　黒褐色砂質埴壌土(2.5Y3/1)　1層より砂粒少ない　炭化物僅かに含む
16層　黒褐色壌質砂土(2.5Y3/1)に15層僅かに混じる


Y=72
-63,580
Y=71
-63,575
Y=70
-63,570
Y=69
-63,565
Y=68
-63,560
Y=67
-63,555
Y=66
-63,550
Y=65
-63,545
Y=64
X=57
X=58
X=59
X=60
X=61
44,220
44,215
44,210
44,205
A'
A
B
B'
C
C'
SD01
SK03
SK03
0
5m
S=1/120
3.000
A
A'
枠石
盛土
旧耕作土
3.000
C
C'
枠石
盛土
旧耕作土
3.000
B
B'
枠石
盛土
旧耕作土

第５図　平面図・断面図

第Ⅱ章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成19年４月26日付けで株式会社クスリのアオキより小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に対し、店舗建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。平成９年度に実施した試掘調査（小松駅東土地区画整理事業に伴って実施）、及び平成19年７月４日に実施した試掘調査の結果、当該事業区域の一部が、周知の埋蔵文化財包蔵地「八日市地方遺跡」に含まれることが確認された。

協議の結果、埋蔵文化財が存在する区域の内、埋蔵文化財の破壊の免れない建物基礎部分132㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。平成19年９月６日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、９月25日付けで委託契約を締結、10月１日より現地調査に着手した。

第２節　調査の経過

建物基礎部分（地中梁部分）のみが調査対象であり、幅約1.2m、深さ約1.5mの溝状の調査となった。当初より想定はしていたが、湧水が激しく作業を進めるにあたっては調査区内の排水が要となった。また、調査中には、雨天時に崩壊した土砂によってポンプが埋まってしまい排水ができず、調査区が水没することがあった。

10月１日：現地調査開始。表土除去。
10月３日：グリッド設定、調査区西側より掘削開始。掘削完了区域から順に写真撮影、図面作成。
10月24日：調査区西側半分埋め戻し。
10月25日：掘削完了、写真撮影、平面図・断面図作成。
10月26日：調査区埋め戻し。
11月２日：器材等撤収。現地調査完了。

第３節　出土品整理・報告書刊行

現地調査完了後、引き続き出土品整理及び、報告書の作成・刊行を行った。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の概要

周知の埋蔵文化財包蔵地「八日市地方遺跡」の範囲の内、建物基礎部分（地中梁部分）を対象に調査を実施した。幅約1.2m、深さ約1.5m、総延長約110mという溝状の調査区である。

表土除去の後、国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に基づき５m×５mのグリッドを設定した。出土した遺物はこのグリッドごとに取り上げた。調査区の基本的な土層は、上から順に110～130cmの砕石と盛り土、10～20cmの旧耕作土、10～20cmの黒褐色砂質埴壌土（１層）で、その下が灰色砂（地山）となる。主にこの１層から遺物が出土する。

調査区平面は、地山面で北西隅が標高1.1m、南西隅が標高1.2m、南東隅が標高1.3mで、北西

から南東方向へわずかに傾斜している。高低差は約20cmである。南北方向にほぼ等間隔に並ぶ深さ10cm程度の浅い溝状の遺構が確認された。覆土中の遺物から判断するといずれも近世以降の耕作に関わるものであろう。その他にも溝状・土坑状の遺構が確認されているが、これらも近世以降の遺構と考えられる。遺物は中世以降のものが主体である。

当初想定していた弥生時代中期の遺構・遺物については、遺構は確認できず、遺物が僅かに数点出土するのみであった。北側に展開する環濠集落は当該事業区域内へは拡がらないようだ。

その他、縄文時代・古墳時代の遺物も僅かだが出土している。

第2節　出土遺物

1．中世土師器

1～10は土師器皿である。小片ばかりで全体形の分かるものはない。2・3・7・8・9・10には煤・油痕が付着しており、灯明皿として使用されていたことが分かる。時期の特定は難しいが、全体として16世紀代から17世紀前半頃に位置づけられるものと考えられる。

2．中世陶磁器

12は越前の擂鉢、16世紀後半以降のものと考えられる。13～15は珠洲の擂鉢。13は生焼けの焼成不良品。14は片口部分、口縁帯に波状文が施される。時期は14が14世紀後半～15世紀前半頃、13・15は不明である。16も珠洲。壷の体部か、時期不明。17～19は青磁。17は蓮弁椀、18は無文椀、どちらも14世紀頃のものと考えられる。19は口縁部破片で器種・時期は不明。特殊な器形であろう。20～23は瀬戸・美濃。20は天目茶碗。21は丸皿。22は口縁部の小破片で全体形は不明だが折縁皿と考えられる。23も底部の破片、皿類であろう。糸切り痕が見える。瀬戸・美濃についてはいずれも時期の特定は難しい。

3．その他の遺物

11は縄文土器。深鉢の体部の破片、沈線がみえる。時期は縄文時代晩期前半頃と考えられる。24～26は円形陶片。加賀焼の破片を打ち欠いて円形～略円形に整形したもの。27は銅銭（寛永通宝）。1636年（寛永13）初鋳である。

その他、小片のため図化しなかったが、縄文土器・弥生土器・土師器などが出土している。縄文土器は体部片が5点出土、縄文時代後期～晩期頃のもの。弥生土器は体部片が6点出土、弥生時代中期頃のもの。古墳時代前期頃と考えられる土師器も5点出土する。縄文土器・弥生土器は、八日市地方遺跡のこれまでの調査においても同時期のものが出土している。

第3節　総括

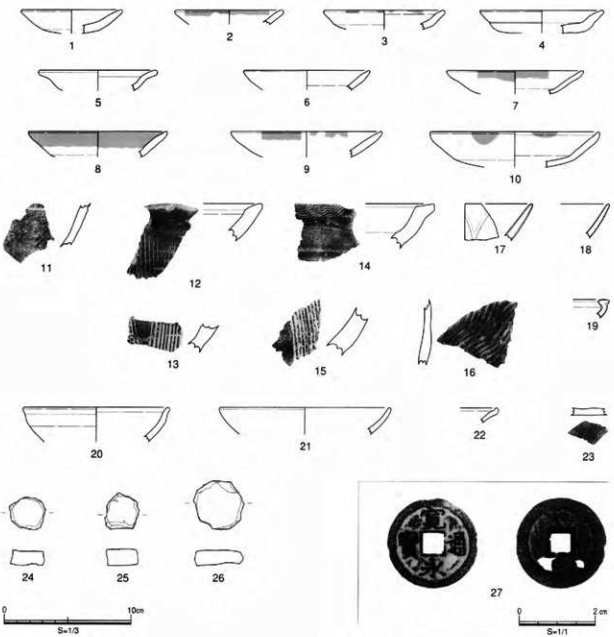
平成9年度に小松駅東土地区画整理事業に伴って実施した試掘調査の結果、県道南側の区域の一部で遺物が出土しており、当該事業区域にも弥生時代中期の環濠集落が拡がることを想定していた。しかし、調査では主に中世以降の遺物が出土し、弥生時代中期の遺物は僅か数点出土するのみであった。また、遺構についても近世以降の遺構が確認されただけで、弥生時代中期の遺構は確認できず、県道北側の区域に展開する環濠集落が当該事業区域には拡がらないことがわかった。

小松の中心市街地には、砂堤帯を横切るように九龍橋川・猫橋川が東から西へ流れている。猫橋

川は現在、当該事業区域の北に隣接する県道の下に暗渠化されている。流路の変遷は不明だが、江戸期にはこのあたりを流れていたことが絵図などでも確認できる。発掘調査の結果からみても、おそらく中世にはこのあたりにあり、その南には耕作地が広がっていたと考えられる。

また、弥生時代中期における猫橋川の流路は不明であるが、集落域が県道を境に南へは広がらないことから、弥生時代からこの場所に位置していた可能性もある。これまでの調査で確認されている埋積浅谷と猫橋川に挟まれ、これらを外堀とするように集落が展開していたのかもしれない。

今回の調査では、縄文時代後・晩期、弥生時代中期、古墳時代前期、中世以降の遺物が出土した。縄文・弥生・中世の遺物はこれまでの調査でも出土しているが、古墳時代の遺物は出土していなかった。ただ、本遺跡の南西約1kmに位置する上本折遺跡においても同時期の遺物が出土していることから、砂堤帯上のどこかに当該期の遺跡が存在することが推測できる。



第6図　遺物実測図

番号	出土Gr	種　別	器種	寸　法（cm）	残　存	色　調	焼成	備　考
1	59-70Gr包含層	中世土師器	皿	口8.0	1/12	10YR6/1褐灰	良	灯明痕
2	59-66Gr包含層	中世土師器	皿	口8.6	1/6	10YR8/2灰白	良好	灯明痕
3	58-70Gr包含層	中世土師器	皿	口9.6	1/12	10YR8/2灰白	良	
4	59-70Gr包含層	中世土師器	皿	口9.8 底6.4	1/18	10YR7/2にぶい黄橙	良	
5	58-71Gr包含層	中世土師器	皿	口9.4 底5.6	1/12	7.5YR8/4浅黄橙	不良	
6	表土除去	中世土師器	皿	口10.0	1/12	7.5YR7/3にぶい橙	良	灯明痕
7	59-65Gr包含層	中世土師器	皿	口10.8 底5.6	1/12	10YR8/2灰白	良好	灯明痕
8	58-71Gr包含層	中世土師器	皿	口11.0 底6.4	1/9	10YR8/3浅黄橙	良好	灯明痕
9	60-64Gr SK03	中世土師器	皿	口12.0	1/12	10YR7/2にぶい黄橙	良好	灯明痕
10	60-64Gr SK03	中世土師器	皿	口13.4 底8.8	2/9	10YR7/2にぶい黄橙	良好	

第２表　中世土師器観察表

番号	出土Gr	種　別	器　種	寸法(cm)	残　存	色　調	焼成	備　考
12	60-68Gr包含層	越前	擂鉢	－	口縁破片	5YR5/4にぶい赤褐	不良	16ｃ後～
13	58-71Gr包含層	珠洲	擂鉢	－	体部破片	外2.5Y6/1黄灰 内10YR7/3にぶい黄橙	不良	
14	58-70Gr包含層	珠洲	擂鉢	－	口縁破片	N6/1N	良好	14ｃ後～15ｃ前
15	60-65Gr包含層	珠洲	擂鉢	－	体部破片	10YR6/1褐灰	良好	
16	60-64Gr包含層	珠洲	壺	－	体部破片	5Y6/1灰	良	
17	60-64Gr包含層	青磁	蓮弁椀	－	口縁破片	釉10Y6/2オリーブ灰	良好	14ｃ
18	59-66Gr包含層	青磁	無文椀	－	口縁破片	釉7.5Y7/3浅黄	良好	14ｃ
19	59-71Gr SD01	青磁	不明	－	口縁破片	釉10GY6/1緑灰	良好	特殊器形
20	68-65Gr SK03	瀬戸・美濃	天目茶椀	口11.6	1/12	釉7.5Y4/2灰褐	良	
21	59-67Gr包含層	瀬戸・美濃	丸皿	口13.6	1/12	釉5Y5/4オリーブ	良好	
22	59-71Gr包含層	瀬戸・美濃	折縁皿？	－	口縁破片	釉2.5Y6/3にぶい黄	良好	
23	58-70Gr包含層	瀬戸・美濃	皿？	－	底部破片	地10YR7/1灰白	良	底部糸切り

第３表　中世陶磁器観察表

番号	出土Gr	種　別	名　称	寸　法（cm）	色　調	備　考
11	59-70Gr包含層	縄文土器	深鉢	－	10YR6/6にぶい黄橙	縄文晩期前半
24	58-70Gr包含層	円形陶片	－	長2.6 幅2.9 厚1.2	N4.5/1灰	加賀
25	59-67Gr包含層	円形陶片	－	長2.9 幅2.6 厚1.3	7.5YR4/3褐	加賀
26	60-70Gr包含層	円形陶片	－	長3.9 幅3.9 厚1.2	2.5Y5/1黄灰	加賀
27	60-68Gr包含層	銅銭	寛永通宝 （古寛永）	外郭外径2.38 外郭内径1.95 内郭外径0.7 内郭内径0.55	－	1636年初鋳

第４表　その他の遺物観察表

遺物観察表凡例

１．寸法について

口は口径、底は底径を示す。

２．色調・焼成について

色調については、土器表面の中で主体を占める色調を『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修）に基づき、その表示方法に従って示した。

焼成は土器の焼成具合を、焼き締まりの強い順から、堅緻－良好－良－不良の４段階で示した。

３．残存について

口縁部の残存率を示す。

４．縄文土器について

縄文土器の器種・時期等の判定は宮田明（小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室）が行った。

５．中世の土器について

中世の土器の器種・時期等の判定は川畑謙二（小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室）が行った。

引用・参考文献

石川県教育委員会　（財）石川県埋蔵文化財センター　2004　『幸町遺跡』
石川県教育委員会　（財）石川県埋蔵文化財センター　2007　『小松城跡』
小松市　1999　『新修　小松市史　資料編１　小松城』
小松市　2000　『新修　小松市史　資料編２　小松町と安宅町』
小松市　2002　『新修　小松市史　資料編４　国府と荘園』
小松市教育委員会　2005　『幸町遺跡Ⅰ』
小松市教育委員会　2006　『幸町遺跡Ⅱ』
小松市教育委員会　2003　『八日市地方遺跡Ⅰ』

調査地

表土除去

掘削作業

57～60-71Gr完掘（南より）

58,59-68～71Gr完掘（東より）

59-64～67Gr土層断面（西より）

59～61-64Gr完掘（南より）

埋め戻し

写真図版2

10

11

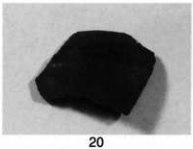
12

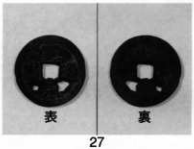
13

14

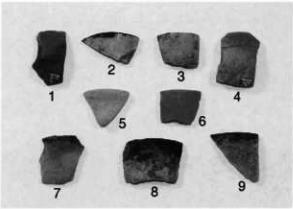
15

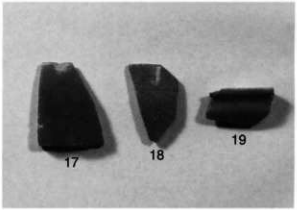
16

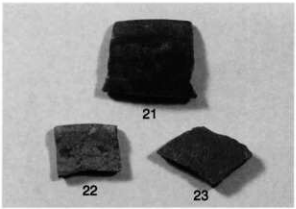

20

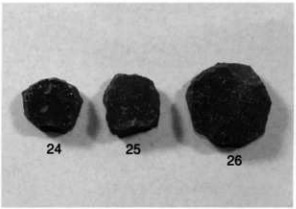


27









報告書抄録

ふりがな	ようかいちじかたいせきⅣ
書名	八日市地方遺跡Ⅳ
副書名	店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂下義視
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地　TEL 0761-22-4111
発行年月日	2008年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ようかいちじかたいせき 八日市地方遺跡	いしかわけんこまつしひのでまち 石川県小松市日の出町	17203	03152	36度 23分 47秒	136度 27分 28秒	2007.10.01 ～ 2007.11.02	132㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八日市地方遺跡	散布地	中世	－	縄文土器、弥生土器、中世土師器、中世陶磁器、銭貨	

要約	縄文時代後・晩期、弥生時代中期、中近世の遺物が出土した。調査区北側で確認されている弥生時代・中世の集落の周辺に位置すると考えられる。

八日市地方遺跡Ⅳ

店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　平成20(2008)年３月28日

発行者　株式会社クスリのアオキ
〒924-0057　石川県白山市松本町2512番

石川県小松市教育委員会
〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地

印　刷　株式会社　ゲンダ美術印刷